新施設紹介

立教学院展示館

中村慎一朗

立教学院の歴史を組織的に研究する機関として二〇〇一年度、立教学院史資料センターが大学に設置（センター長任命は前年一二月）されて以来、常設展示場の設置は当センターの悲願であった。そのため、当センターでは展示施設のあり方や展示内容、展示技術についてたえず研究・検討し、学院・大学当局に常設展示場の設置を求めてきた。二〇一二年度、学院理事会はその設置についての検討を認めたが、展示は全学院規模の事業であるとして学院企画課が事務局となり、事業化することとなった。その結果、展示館は歴史に特化せず、立教学院の現在の姿や将来への展望をも発信する広報的媒体としての役割をも担うよう期待されるようになった。従って名称も「立教学院史」展示館ではなく、「立教学院」展示館とされた。その趣旨は同館の英語名（後述）に、より鮮明に現われている。こうして、立教学院史資料センターとは別の立場から立教史の叙述を展開する施設として開館半年余りを経た同館について、当センターで立教史資料の整理や分析にも携わる若手研究者・中村慎一朗氏がレポートする。

立教学院展示館の目的

立教学院展示館は、児童、生徒、学生の自校教育の場としてだけでなく、校友、保護者、地域などの方々に対しても立教学院の歴史と教育および研究の成果を発信する場として活用することを目的として設立された。

学生に、大学の歴史を築いてきた先学や先輩の願いに触れる機会を与えるだけでなく、父兄の方々や地域住民の方々にも「立教」と自分たちの暮らしを考える機会を提供することも企図しており、広義の意味としての「オール立教」の広場にしたいということである。

立教学院展示館の概要

展示館は、メーザーライブラリー（旧図書館旧館）の二階にある。そこは、二〇一二年十一月までは図書館として利用されていたフロアである。そして企画展示と常設展示の二つのゾーンが設けられている。

企画展示用のスペースは、企画展示が催されている期間はテーマに沿った映像を流しており、通常は立教学院の歴史を振り返る映像が流れている。またPCが六台設置されており、立教学院の歴史に関する各トピックの映像を個別に視聴することが可能である。

常設展示は大きく分けて五つのコーナーに分かれていて、ウィリアムズ主教が日本に赴き、立教の基礎を築い

た時期から現在に至るまでの約百四十年間の歴史を紐解いている。以下、常設展示の各コーナーについて簡単に紹介したい。

「創立者ウィリアムズ」では、ウィリアムズ主教の足跡を辿るようになっているほか、衣服や鞄、会計簿、手帳などが展示されている。そこにはウィリアムズ主教の几帳面な性格をうかがい知ることができる。

Ⅰ「築地での誕生」は、立教学院の創立と立教尋常中学校、「立教大学」の設立に関して紹介するコーナーで、出席簿や大学校規則、教科書などが展示されている。そこには、創設当初の温もりのある雰囲気を感じさせる。しかし、一八九九年の文部省訓令第一二号により立教は、キリスト教教育の対応を迫られ、学校教育と宗教は切り離されることとなった。それが学生にとっては衝撃的な出来事だったことが当時在籍していた学生の日記から読み取れる。

Ⅱ「池袋という新しいキャンパスへ」では、大学令による大学昇格と関東大震災、戦時下の立教について展示している。戦間期については、立教中学校の「学校市」という自治組織に関する史料が展示されていて戦後の生徒会を彷彿とさせる反面、学校教練が一九二五年に義務化されて軍事教練を行ったことも展示によって示唆している。

そして戦時期に関しては、勤労動員に関する写真や史料の展示のほか、校歌から「自由の学府」が消えたエピソードを紹介している。また戦地から在籍学生が母に宛てた手紙や近年返還された「寄せ書きのある日の丸」などが展示されている。さらに、時代が前後するがチャペルの名称が修養堂に変更されたのちにチャペルそのものが閉鎖される流れのほか、寄附行為にあるキリスト教主義という文言の削除に関する展示もあり、戦時中の立教学院の苦悩を展示史料が物語っている。

Ⅲ「立教学院の戦後」では、戦後復興と新制への移行と立教学院の戦後の発展をテーマに構成している。学生が日記に綴った空襲に関する記述、そしてＧＨＱによる学院幹部の追放に関する展示がある。また立教中学校の教務日誌などの展示で旧制から新制への移行に関することがわかるようになっている。

このコーナーでは、絵日記や成績簿、そして卒業証書、また立教祭のパンフレットやキャンパス雑誌など学生生活にまつわる展示がなされており、卒業生にとっては懐かしさを感じさせるものとなっている。

Ⅳ「立教学院の現在」のコーナーには、近年設置された学部の紹介のほか、立教学院が重点的に取り組む一貫連携教育について解説しており、立教学院の未来予想図を把握できるようになっている。

展示の特徴

展示スペースにおいてデジタルコンテンツを活用したことに展示館の特徴がある。三か所設置されているタッチパネルを利用して築地校地、池袋キャンパスの変遷、そして学生生活の変化などについて理解することができる。また、二つ一対で設置されているタブレット端末もある。一つは子ども向けに作成されており、映し出された画像の意味を伝えている。もう一つは大人向けで当時の写真や史料を閲覧することができる。子ども向けのパネルも史料展示の補足になっているので、両方の端末を閲覧することをお勧めする。

また、スペースを最大限に活用するために各所に引出し展示が施されており、全部で五十七の引出し展示がある。そのコーナーに関連した史料を閲覧することが可能であるため、見逃せないようになっている。

最後に、大学生の感想および意見を記して終わりとする。立教のルーツが築地に在ったこと、マキムホールやロイドホールなどの名称の由来を初めて知った学生が多かったほか、医学部構想にも関心をもったようだ。また、戦地に赴いた学生が家族にあてた手紙に心を打たれたという声もあった。立教学院のルーツが築地にあることを知らなかった学生がいたことは大変意外であった。

立教大学の歴史、例えば医学部構想や戦時中のエピソードあるいは今世紀に至って返還された「寄書きの日の丸」などについては書籍やブックレットなどで詳細に描かれており、そちらを参照して、さらに見識を深めていただきたい。

【立教学院展示館】（英語名：The Heritage and Future of Rikkyo）

ＨＰ：http://www.rikkyogakuin.jp/hfr/

所　在　地：東京都豊島区西池袋三丁目三四―一

問合せ先：〇三（三九八五）四八四一

開館日時：

（大学授業期間中）

月曜日～金曜日　一〇：〇〇～一八：〇〇

土曜日　一一：〇〇～一七：〇〇

（大学長期休業期間）

月曜日～金曜日　一〇：〇〇～一七：〇〇

土曜日　一一：〇〇～一七：〇〇

休　館　日：日・祝日（変更の場合あり。ＨＰを参照のこと）

入　館　料：無料

なお、本学関係者、一般に関わらず団体で訪れる場合は、快適な見学環境を保つため、あらかじめ展示館に連絡しておくとよいと思われる。

【謝辞】今回の執筆に当たり、齋藤邦明経済学部助教および基礎ゼミナールの学生の方々には、多大なるご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。